

京鹿子

京都府立総合資料館蔵
京鹿子 8月号

8月号

豊田都峰

灌響集 その四十八

薰風は永遠のクルスの右近像
伊勢寺にとなる法師塚薰風裡
青嵐たちまち整ふ大古墳
水替へて金魚を空にもどしけり
魚かげもみどりに谷のふかさかな
はつたいや妣挽きし音より絶えし





黄金虫いく重の闇の前後ろ
黄金虫闇とぶほどに羽のつや
今は風棲む羅生門址の大みどり
蟻の列塔ふり仰ぐこともなし
炎負ふ仏の視野は大みどり
火車背負ふ仏の矛先よりみどり
踏れ邪鬼のまんまるの目にみどり立つ
葉柳の川すぢ人のそぞろなる



—丸山佳子作品—

藍日傘

丸山佳子



顔 白 く み ゆ 藍 日 傘 好 み け り
は な や か な 日 傘 に 南 風 の 重 み あ り
針 山 に 針 錆 び 夏 の 旅 を は る
油 蟲 打 つ 信 心 の ふ か み 身 に
梅 干 し て 母 に 逢 ひ た き 日 な り け り

秀華採集

そのあとは枝移りして遅日かな

鷺山 珀眉

本題はすでにすんだ状態から始めている点がおもしろい。場を変えての「遅日」がすべてを語っているのである。すると本題の場は反「遅日」的かなど、さわがしいことである。

沙羅こぼれ別の日暮れの中にある

門馬 貴美子

夏落葉沢飛び石にしばし溜む

荒尾 茂子

前句は「別の日暮れ」としながら今とおなじような日暮れかも知れない。後句は偶然的な一瞬を把握しているが、季語としてたびたび散らない「夏落葉」とした点を評価したい。



—近詠—

鈴鹿
仁

宝さがし

虹立ちて宝さがしはあの山で
虹の橋からすの群れへよき明日
足早と謂ふ速さあり夏真昼
梅雨明けの雲眺めてる亀の首
ネクタイを緩め直して小暑の風



— 近 詠 —

和田 照海

伊予三庵

俳 諧 の 祖 の 庵 二 畳 孕 み 鳥
藤 波 や 庚 申 庵 の 連 句 巻 く
連 衆 の 正 座 の 躑 藤 明 か り
隣 より 竹 の 子 の ぞ く 一 草 庵
石 ころ に の ぼ る 居 士 と や 柳 絮 と ぶ



八十八夜

北村香朗

八十八夜ツアー参加に誘はれて
八十八夜茶つみの仕草教はるる
よく晴れて幸とせむ春満月
苜蓿一とふりさらと拂ひけり
相寄りて離れもありて花筏

老佳境

竹貫示虹

初秋の加齡佳境に入りにけり
お互に死ぬもの同志夕かなかな
喜も悲にも終りありけり赤のまま
有漏々々と水の流れに似て秋へ
息つめて見守るばかり笹の露

棕栢の花

藤岡紫水

降ろさるる刻きて拗ねる鯉幟
鬼太鼓狂ふ浜辺や能登の夏
波が波追ひて卯の花月夜かな
カーネーション八重なす辨に母憶ふ
夜の雨をひそかに抱きて棕栢の花

木綿日和

北川孝子

今もある幾許の覇気花洛の忌
大みどり明日へあしたへ何か追ひ
死に順を誰が狂はずしやぼん玉
みどり濃し木椅子に涙脆くゐて
かしわ餅いよよ木綿日和かな

松田都青

合掌の掌に持ち帰る遍路心
いつまでも過去は綺麗な春霞
飛ぶてふ字不時着しさうで花の風
村中の蝶が来てゐる母の葬
語るより疲れる沈黙花の宵

山法師

柴山朱美

曳く杖の音定まらぬ山法師
夕暮をこぼみてゐたる山法師
ひとつふたつ修羅も蔵して山法師
山法師足のもつれる母を曳く
梵鐘の余韻の流る山法師

神麓集



灌 仏 会
丸 井 巴 水
花 祭 り 閻 魔 は す で に 顔 見 知 り
花 ま つ り 朱 印 乾 か ぬ 御 礼 受 け
し わ し わ の 川 を 細 め て 菜 種 花
地 獄 絵 の 中 よ り 抜 け て 暖 か し
さ く ら 道 途 絶 え 隧 道 大 曲 り

薔 薇 の 午 後
塩 貝 朱 千
散 り 薔 薇 や い の ち の パ ズ ル 野 に 拡 ぐ
風 は 波 と な る バ ラ 苑 の 海 原 に
ぶ つ き ら ぼ う な メ ー ル ま た 来 る 薔 薇 の 午 後
白 ば ら の 渦 に 抱 か れ る 白 昼 夢
水 無 月 や シ ャ ン パ ン い ろ の 愛 唄 ふ





京鹿子集

豊田都峰選

そのあとは枝移りして遅日かな

城陽 鷺山 珀眉

とある日の微分積分根分けして

ひとしきりペペロンチーノときさへづれり

新緑や本殿いまは文化財

沙羅こぼれ別の日暮れの中にある

京都 門馬貴美子

鮎鮎やふるさとの山遠く置き

筋書のずれ込む旅路青葉騒

葭戸透く風に小揺れの絵らふそく

夏落葉沢飛び石にしばし溜む

荒尾 荒尾 茂子

青嵐藪から兎跳び出せり

結びしも解きたるも風藤の房

枝折戸の開け閉てに降る松落葉

オムライス家族の匂ひみどり風

夏めくやサボテンジュースで乾杯す

ペルー料理土産話の夏帽子

帰国して老舗の名あり麻暖簾

黄水仙個性豊かなラツパ吹く

桜の木うす桃色がパツと目に

黄みどりの萌木林立五月晴

青空にはくれん清楚華麗なり

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

囀りを真似る子も居て登校す
札幌 野村 軻枝

春惜しむ金比羅歌舞伎果てにけり

永き日や又読み返す旅だより

春惜しむ一期一会の旅仲間

梅の香にのし梅思ふ梅香寺

桜咲くいつもの憂ひ残しまま

散り桜それぞれ行く道のし

子ら集ひ孫は部活やみどりの日

朝の園空ブランコの花吹雪

芽柳の影落す濠波光る

バギー押す母の靴音風光る

芸終へて猿のお辞儀や園は春

桃月夜河原に影のサキソフオン

また余震杉菜になるも生き残る

見話めすぎかと春満月に雨戸閉め

洞の奥うかがふだけで帰る蝶

剥落の余音まつ赤なさくら蕊

日常をもう食み出してゐる黄蝶

はうれん草の赤いところを老いるかな

異次元を泳ぐまんぼう春愁ひ

まなじりに一瞬の彩濁り鮎

こでまりや雫に委す分かれ道

ジエツト機ととんびの交差して立夏

唐突に海で泣きたし葱坊主

ころがりて止まる鉛筆鳥の恋

どの路地を抜けてみやうか鼓草

芝桜をんな同志といふ疲れ

ティーシャツのモンローの唇聖五月

四月来る駅舎に若き靴の音

釣り人の演歌を流す春の昼

家移りすパンジーの鉢助手席に

古家に心残せり名草の芽

麦秋や手荒れの農婦パンを買ふ

黄砂ふる祈りのごとき園児のうた

先頭は左右に揺れる葱坊主

新任に抜かるるなけれ葱坊主

ポケツトに春風も入れ一年生

朝掘りの筍売りの婆の皺

武蔵野の大地のひびき春嵐

小さき鉢トリコロールの花選ぶ

ぼうたんの紅を崩して風過ぐる

喧噪を避くる階薬降るよ

浦島草釣糸のびて月替る

花は葉に女米寿の声残す

佐々木紗知

布川 孝子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

高野 春子

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

酒田 藤波 松山